

家康没後四百年、今改めて学ぶ
「徳川三百年の基礎を築いた組織と管理」 二

講師 一龍斎貞花

徳川家康一代の大難戦といわれま
すのが、武田信玄と戦った三方ヶ原
の合戦でございます。

時なるかな元龜三年（一五七二）
壬申^{みづのえととし}歳十月十四日、甲陽の大守武
田大僧正信玄三万五千の大軍を率い
て、都へ馳^はせ上^{のぼ}らんものと甲府八
つ花形を雷発^{らいはつ}なしたり。（パパンパ
ン！）

スワヤ一大事と、浜松の家康はた
だちに同盟を結んでいる織田信長に
援軍を求めたものの、

「信玄と戦って勝てる見込みはな
い。我軍も強敵浅井と戦いの最中、
大勢の援軍送ること叶い難し。岡崎
へ引上げ城を固められよ」
と、信長わずか三千の援軍しか送っ

てこない。しかも無理な戦いはする
など言い含められておりますから当
てになりません。

破竹の武田軍は、浜松城を無視し
て通り過ぎるという。

新曆にすれば一月の終り、寒さ厳
しき中、家康は窮地におち入った時
のくせで、爪をかみ目を血走らせ、

「このまま居すくんでおれば弓矢の
恥辱。臆病者よとあざけられるは必
定。ならば息の続く限りに戦ってみ
るまでのことよ」

慎重な家康といえど、敵に無視さ
れおめおめ引き下つてなるものかと、
三十一歳の血気盛ん、籠城をとこなえ
る意見をしりぞけ出陣と決定。

武田勢は浜松城を無視して通り過
ぎようとした説がありますが、浜名
湖の岸にある堀江城を落とせば、浜

松と岡崎を遮断することが出来る上、
徳川勢を城外へ誘い出すための行動
であったともいわれます。

雪まじりの風強く、ぼうぼうたる
三方ヶ原の野に戦いの火ふたがきつ
て落とされました。（パパン！）

武田軍三万五千に対し、徳川軍は
総軍合してわずか八千。いかに戦上
手の家康といえど、武田自慢の騎馬
武者の怒涛の攻撃に、どつと崩れる
徳川勢。家康は、二、三十騎の旗本
に守られて退りぞかんとする。その
行手行手に立ちふさがる甲州勢。

馬上に突立った家康目を吊り上げ、
「最早これまで、敵軍へ切り込みわ
しは死ぬるぞ」

わめき立てるや津波の如く押し寄
せる武田勢目掛けて突き入らんとし
た。と、この時、浜松の城を守って
おりました夏目次郎左衛門、二十五
騎を率いて救援に駆けつけて参りま
す。

「殿は一騎駆けの武者にはござりま
すまい、何卒お立ち退きを」

と、槍の柄で馬の尻をピシツ。馬
は浜松目指して一散に駆け出してい
く。ニッコリ笑った次郎左衛門、家
康の兜をかぶり、二十五騎を従え武
田の大軍の中に躍り入り全員壮烈な
討死。家康の身代りとなって敵を防

いでおります間に、家康駆けに駆け、この時恐怖の余り大を洩らしながら浜松の城へ逃げ込んだ。鞍壺に洩らした大を見つけた大久保忠世が、「殿には、糞を洩れて逃げてこられたか」

大笑いするや、家康は、「これは弁当の味噌じゃ」と、言い張ったと申します。

気も狂わんばかりの形相で城へ逃げこんだ家康、搦手の門をくぐるやそれまでの狂態どこへやら。

「城門をことごとく開けよ、大篝火を焚け、橋は落とすな」

命じるや城内に入り、

「湯づけを持て」

三杯かきこむや、その場にゴロリと横になり、グーグー高いびき。恐怖におびえていた面影、どこにもなし。

爪をかむくせのある男は発狂する

アメリカの軍事医学によると、爪をかむくせのある男は、戦場へ出ると発狂するといわれ、ドイツのヒトラーも、戦場で常に不安に襲われて

爪をかみ続けたと申します。家康は軍議の最中でも、手にした鞭や指揮棒を絶え間なく叩き続けたり、戦場では鞍壺をどンドン叩き、皮が破れ血が流れタコが出来、指の屈伸が思うようにいかなかったほどで、はたからみれば小心で落着きが無いように見えるが、信玄は「小心、臆病者ではあるが頑固者」と、家康の性格をつかんでいます。

浜松の城門開られ、大篝火がたかれ、堀には橋が掛ったままで渡つてこいといわんばかり。攻め寄せた甲陽名代の山形昌景、馬場信房。

「完膚無きまでに敗れているながら城門開くとは不思議、うかつに兵を進めてはならん」

信玄も、「なにか計略あるに違いないし、ここはひとまず兵を退いたがよからう」

窮地に陥った時に冷静に対処出来るか。生き残りの必須条件

三国志の智将諸葛孔明が、魏の司

馬仲達に囲まれた時、城門を開き平服に着替えて望楼にのぼり、静かに琴を弾く悠然たる姿に、仲達も名うての智者ですから、「孔明のこと、策略があるに違いない、うかつに攻め込んでならん」と、軍を退いた空城の計と同じ。

もし信玄でなく、いけいけの上杉謙信ならば一気に攻め込み、徳川はここで亡びていたことでしょう。

家康は、顔面蒼白、頬のこけた恐怖におののく顔を絵描きに描かせ、以後なにかある度に、凡れその絵を見て石橋を叩いても渡らぬようになるのです。

一方陣を退いた信玄、この時胸を患っていたか、或いは癌であったあか、体調優れず肺炎を起し、

「三年の間喪に服し、戦つてはならん」の遺言を残し、弓矢の聖

とうたわれた英雄も五十三歳をもって戦場の露と消えたのでございます。

もし家康がここで討たれていたならば、その後徳川三百年の天下はなく、日本の歴史も大きく変っていたかもしれませぬ。

追いつめられた時、徳俵でふんばって残し、寄り返えず、そんな経営を心掛けて頂きたいものです。

家康逆転の発想、浜松空城の計の一席。(パパンパン)



三方原古戦場の碑